

刺激形態と記憶方略が偶発記憶に及ぼす影響

西山 ひなた

同じ概念を表すものであっても単語よりも画像の形で表示の方が記憶成績は良いとされる現象は画像優位性効果として知られているが、その生起理由に関しては様々な議論がなされている。概念的示差性仮説では、概念の処理には、特定の概念やカテゴリを区別し、明確に識別するのに役立つ概念的示差性が関わっており、画像は概念的示差性が高いため、画像優位性効果が生起すると主張している。本研究は、情報伝達性に長け、概念的示差性情報を含むと考えられる漢字と比較しても画像優位性効果が生じるかを検討した。第一に、刺激を画像で提示した場合の方が、漢字で提示するより正再認率は高く、虚再認率は低くなるという画像優位性が生じるとする仮説を立てた(仮説 1)。第二に、刺激を提示した際にその刺激を命名する(漢字の場合には読む)命名条件においては、画像優位性効果が見られる、つまり漢字刺激よりも画像刺激の方が正再認率は高く、虚再認率は低くなる画像優位性が生じると予想した(仮説 2)。第三に、提示された刺激が「生き物」と「人工物」のどちらに分類されるかを声に出すカテゴリ分け条件においては、このような差は見られないと予想した(仮説 3)。実験 I では 36 名の参加者ごとに、20 項目の刺激を画像と漢字の形態で提示し、命名条件とカテゴリ分け条件を設定した。実験 I では、その際に偶発課題として刺激に対する好き・嫌いを判断させた。その後干渉課題として 2 分間計算課題を実施し、再認段階では 20 項目の刺激に加え、ルアー項目と未学習項目を含めた 40 項目に対する既出・新出判断を行い、再認成績に影響が生じるかを調べた。実験 I の結果、再認成績は、刺激形態および記憶方略による有意な差が見られず、仮説 1 および 2 は支持されず、仮説 3 は部分的に支持する結果となった。よって、実験 I では漢字と比較した画像の優位性は認められなかった。

実験 I の結果から、学習段階で参加者が意図的に学習を行っていた可能性、そして干渉課題の干渉の程度が弱かった可能性があったため、実験 II では、実験参加者数、学習段階における偶発課題、干渉課題の 3 点を変更した。実験 II には 48 名が参加し、偶発課題として、提示した刺激の動きに応じてキー押しを求める課題を実施した。また、干渉課題として画像刺激妨害のために間違い探しを、漢字刺激妨害のために熟語クロスワード課題を取り入れ、参加者間で干渉課題全体の負荷量を統一するため、いずれの参加者も各 5 分間で 2 つの課題に取り組んだ。実験 II の結果、実験 I と同様、仮説 1 および 2 は支持されず、仮説 3 は部分的に支持した。また、記憶方略間では命名条件がカテゴリ分け条件よりも有意に再認成績が高くなった。よって、実験 II では画像優位性効果は認められなかったものの、偶発記憶における命名の効果が示された。

本研究の結果、偶発記憶課題において漢字と比較した画像の優位性は認められず、画像と漢字が同程度概念的示差性のある特徴を持つことが示唆された。また、記憶の強化には項目の固有名を符号化することが有効であると示唆された。これらは、英単語やひらがななどの単語と比較して画像の記憶における優位性を示すために用いられる概念的示差性仮説が、漢字のように示差性を持つ単語にも適用できる可能性を意味する。また、命名条件の再認成績がカテゴリ分け条件よりも有意に高かったことから、符号化時に概念的示差性情報が処理されるためには、特定の記憶方略が必要であることを示している。本研究により、画像優位性効果に対する概念的示差性仮説には修正の余地があることが示された。(応用認知心理学)